

# フィンランドの社会科教育と教師教育の関連の特質

－ ナショナルコアカリキュラム・教科書・ヘルシンキ大学の授業の分析から －

酒井喜八郎

The Characteristics of social studies and relation between Teacher education in Finland

－ The Analysis of National core curriculum, textbook, lesson of University of Helsinki

SAKAI Kihachiro

キーワード：フィンランドの社会科教育、教科書分析、ナショナルコアカリキュラム、教師教育、ESD

**概要：**本研究の目的はフィンランドの社会科教育の特質と教師教育の関連を明らかにすることである。フィンランドでは、2014年にナショナルコアカリキュラムが改訂された。学びを奨励するだけでなく、必要な知識とスキルを保証することが示された。社会科教科書は、フィンランド社会に起こっている問題についての討論を重視している。また、教員養成としての大学は、社会構成主義的なアクティブラーニングの講義が組み込まれている。フィンランドのコンピテンシーベースの教育は、わが国の資質・能力を目指す新学習指導要領の社会科教育のあり方を考える上で多くの示唆を与える。

## I はじめに

### 1 研究の目的

本研究はフィンランドの社会科教育の動向と教師教育の関連の特質を明らかにすることを目的とする。

### 2 研究の背景と先行研究

わが国では小・中学校の社会科の目標は、グローバル化する国際社会を主体的に生きる公民的資質の育成を目指している。新学習指導要領において、資質・能力を重視し、主体的に社会の形成に参画しようとする態度等の育成や、資料から読み取った情報を基に社会的事象について考察し表現すること等、更なる充実を求めている。いかに学ぶか、どのように学ぶか、どのように人生に役立てるかという21世紀型スキルの育成や授業形態としてのアクティブラーニングが注目されている。

一方、本研究で取りあげるフィンランド共和国は、人口543万人、面積33.8万km<sup>2</sup>で、公用語はフィンランド語とスウェーデン語が話されている。

表1は、フィンランドと日本の比較考察をしたものである。フィンランドは、2003年のPISA<sup>1)</sup>の学力テストで、読解力と数学リテラシー1位、科学的リテラシー3位となり注目されたが、2015

年も読解力について2位、科学的リテラシー3位と上位を維持している。特にフィンランドの特徴として、社会科学習にも大きくかかわる「読解力」が高い。(日本は上位を取り戻したが逆に読解力は低い。)

2004年から10年経ち最近2014年にナショナルコアカリキュラムが改訂された。しかしながら、最近のフィンランドの教育の先行研究は、わが国では2005年以降、ほとんど報告されておらず近年また少しずつ研究が出てきているが、最近のフィンランドの教育の動向は充分明らかになっていない。わが国と同じく、改訂されて間もない新しいナショナルコアカリキュラムに対応して、現在フィンランドではどのような教育が行われているのか、社会科教育を中心に大学の教師教育との関連からその特質を明らかにし、わが国への示唆を考察したい。



図1 フィンランドと首都ヘルシンキ

表1 フィンランドと日本(筆者作成)

	フィンランド	日本
面積	33.8万km <sup>2</sup>	37.8万km <sup>2</sup>
人口	543万人	1億2763万人
教育 PISA 2003	1~9年 読解力1位 科学的リテラシー3位 数学的リテラシー1位	1~6,中1~3年 読解力8位 科学的リテラシー2位 数学的リテラシー1位
PISA 2015	読解力2位 科学的リテラシー3位 数学的リテラシー8位	読解力6位 科学的リテラシー1位 数学的リテラシー1位

フィンランドの教育関係の先行研究は、PISAが注目された2003年前後では、教師教育に着目した田中(2005)があるが、しばらく数年間教育関係の論文はほとんど出ていない。最近、2012年頃からまたフィンランドの教育関係の論文が出てきている(例えば、基礎教育と教師教育の古屋(2012)、理科と教師教育の大野(2013)、生涯教育の澤野(2016)、高学力の渡邊(2017)など)。これは、PISAでフィンランドがトップレベルになり、注目された後他国に抜かれたが、2014年に、日本の学習指導要領にあたるナショナルコアカリキュラムが改訂されたことが、注目のきっかけとなった1つの要因であろう。

しかしながら、これらの先行研究は、高学力や教師教育に関心があるものの理科教育との関連からの研究が多く、社会科教育に関する論文はほとんど見られない。これまで筆者は、シンガポールやオーストラリアのシティズンシップ教育とナショナルカリキュラム・教師教育との関連を明らかにしてきた(例えば、酒井2014、2015a、2016a,b)。本研究も、その一連の研究の1つである。

### 3 研究の方法と手順

フィンランドのヘルシンキとエスポーに2017年9月7日より9月13日まで調査のために7日間滞在し以下の手順で調査を進めた。

- (1) ヘルシンキ大学教育科学部のJan Löfström教授の研究室を訪問し、フィンランドの社会科教育(専門は歴史教育、経済教育)の動向につ

いて半構造化インタビューを行う。

- (2) フィンランドのナショナルコアカリキュラムの社会科の内容記述を中心に分析する。
- (3) フィンランドの2社の社会科教科書、大学での社会科教育の講義用ワークシートの内容を分析する。
- (4) ヘルシンキ大学での授業の観察をする。  
①歴史、②教育方法、③幼児教育
- (5) ヌークシオ国立公園を視察する。

## II フィンランドの教育制度の概観と社会系教科の位置づけ

### 1 フィンランドの教育制度の概観

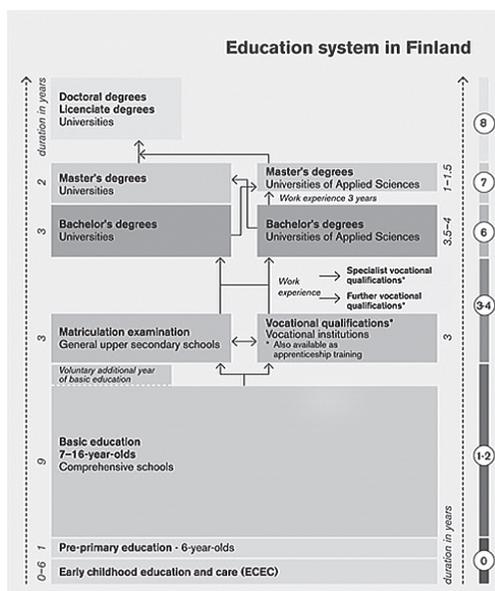


図2 フィンランドの教育システム (Finnish National Agency for Education : [http://www.oph.fi/english/education\\_system](http://www.oph.fi/english/education_system)より)

まず、フィンランドの教育制度について概観してみよう。ペルスコウルという義務教育は、日本と似ている。フィンランドの就学年齢は7歳からである。基礎学校は第1学年から9学年までで9年一貫制である。後期中等教育として基礎学校が終了してから普通高校または職業学校に進学する。普通学校に大学進学を希望する学生が多く集まる。高等教育として、大学は学士課程が3年、

修士課程2年であるが、修士号を取って大学卒業とされる。義務教育の科目としては次のものがある。母語、文学、第2公用語、環境、宗教また哲学、歴史、社会、数学、物理、科学、生物、地理、体育、音楽、美術、工芸、家庭科がある。

また、義務教育の学校には、小学校1年生から6年生までは学級担任 (class teacher)、中学校では7年生～9年生までは教科の先生 (subject matter teachers) がいる。

## 2 フィンランドの教育改革

フィンランドセンター所長のヘイッキ・マキパー (2007) によれば、フィンランドの教育目標は責任ある市民を育成することである。<sup>2)</sup>

それではフィンランドの教育改革への契機は何だったのか。教育を重視しようとした理由は、1991年のソ連の崩壊により、東ヨーロッパの国々との貿易が途絶え失業者が増加するという危機に、フィンランドの将来を担う子どもたちに対する新しい教育について議論されたことにある。

そして、1995年にオッリペッカ・ヘイノネン教育大臣が大きな教育改革を実施したのである。

## 3 ナショナルコアカリキュラムの全体の目標

フィンランドの教育改革が目指す資質・能力については、ナショナルコアカリキュラムを分析する必要がある。2014年12月にフィンランドは、「ナショナルコアカリキュラム: PERUSOPETUKSEN OPETUSSUUNNITELMAN PERUSTEET 2014 (POPS): National Core Curriculum for Basic Education 2014 Finnish National Agency for Education」を公表し、2016年度より実施している。<sup>3)</sup>

ナショナルコアカリキュラムの教育目的は次のように設定されている。

**Goal: to secure the necessary knowledge and skills as well as to encourage learning**

目標: 「学びを奨励するのみならず必要な知識を保証すること」

国立教育政策研究所の高口 (2015) の報告では、フィンランドが目指す資質・能力として、基礎教育法に規定された三つの目標「人として社会の一

員としての成長」「生きるために必要な知識と技能」「教育の機会均等の推進と生涯学習の基盤づくり」、これに基づき策定される『基礎教育における国家目標と授業時数配分に関する政令』に示された教育目標に基づき、7つのコンピテンスを汎用的コンピテンスとして提示している (①思考力・「学ぶことを学ぶ」力、②文化的コンピテンス・相互作用・表現力、③自立心・生きるための技能・自己管理・日常生活管理・安全性、④多元的読解力、⑤ICT コンピテンス、⑥職業において求められるスキル・起業家精神、⑦参加・影響・持続可能な未来の構築)、とある。

今回フィンランドの教育状況を見ても、ATC21s (Assessment and Teaching of 21st Century Skills) など21世紀スキル等の影響がありコンピテンスベースの世界の教育の潮流の中にあることがわかる。

## III フィンランドの社会科教育

### 1 フィンランドにおける社会科教育の概要

それでは、次に具体的にフィンランドの社会科教育について見ていこう。

#### (1) フィンランドの社会科教育の目標

フィンランド語で、社会科: Yhteiskuntaoppi の目標は、「社会科を教えることは積極的で責任ある生徒の成長を支援することである。」となっている。

資料1のように社会問題を中心とする市民性を育成する教育が推進されている。

#### 資料1: POPSに記述されている社会科教育の内容

##### 14.4.9 Yhteiskuntaoppi 社会問題 (POPS: p.p.260より)

Yhteiskuntaopin opetuksen tehtavana on tukea oppilaiden kasvua aktiiviseksi, vastuuntuntoiseksi ja yritteliäksi kansalaisiksi. Oppilaita ohjataan toimimaan erilaisuutta ymmärtävässä, ihmisoikeuksissa ja tasa-arvoa kunnioittavassa moniarvoisessa

yhteiskunnassa demokratian arvojen ja periaatteiden mukaan. Oppiaineen tehtävänä on antaa yhteiskunnan toiminnasta ja kansalaisen vaikutusmahdollisuuksista tiedollinen perusta sekä rohkaista oppilaita kehittymaan oma-aloitteisiksi 4)

## (2) 社会科カリキュラムと基礎コアカリキュラムのなかでの社会科の目的と位置づけ

社会科カリキュラムは2014年のナショナルコアカリキュラムに詳しく記述されている。社会科教育カリキュラムを概観すると次のような特色が抽出できる。フィンランドの社会科は、フィンランド社会に起こっている問題を取り上げ、市民性とESDを核にして、アクティヴ・シティズンを育てていると考えられる。フィンランドにおいて社会科は、中核とまでは言えないが、小学校で150%、中学校で50%時間数が増加していることからかなり重視されている教科であるといえる。

## (3) ヘルシンキ大学の社会科教員への半構造化インタビュー (2017年9月7日)

Jan Löfström 教授は最近2つの社会科教育論文(経済教育と社会科リテラシー)を執筆している。Jan Löfström 教授に対して、フィンランドの①ナショナルコアカリキュラム②社会科教科書③大学の講義や教員養成について、2017年9月7日に半構造化インタビューを約2時間実施した。

「フィンランドでは、社会科という教科はとても重要だとみなされます。その理由は、意志決定を理解しなければならない市民が、既に子どもの時に学校でいかに人が民主主義のプロセスに影響を与え、参加することができるかという体験をすることができる、という理由からです。」

Jan Löfström 教授の言葉からも、フィンランドの社会科が市民性育成のための教科として重要視されていることが読み取れる。約10年ごとに改訂されているフィンランドのナショナルコアカリキュラム(POPSフィンランド語版)と社会科について討論した。社会科(公民)は伝統的に14歳~15歳の第9学年で伝統的に実施されてきて

いる。



写真1 Jan Löfström 教授(社会科教育)とフィンランドのナショナルコアカリキュラム(机上の青色の表紙のPOPS)

昨年より、公民は第4学年から第6学年でもまた教えられている。対象生徒はそれぞれ11歳、12歳、13歳である。そして、それを組織する市でも異なっている。市は、10歳~11歳の第4学年で公民学習を始めることを奨励してきた。地方の教育委員会がどのような学びにするか決定する。

ナショナルコアカリキュラムにおける社会科の目標や内容は260頁から、歴史教育は418頁から記述されている。その内容は普通、第4学年と第9学年の2年間の間に教えられる。

Jan Löfström 教授へのインタビューによれば、「社会科学習と社会科の有用性の生徒の意識」について尋ねたところ、2011年の調査では、第9学年の生徒は、社会科が大変役に立つと考えており、学校科目として良いと考えているということである。

フィンランドの学校教育は、個人の利益を守り、より良い社会的地位を得るためだけのものではなく、若い頃から社会的責任を教えるためのものであると考えられている。

社会科は、それを具現化する教科であるといえよう。

表2を見てわかるように、ヘルシンキ大学はツールクに最初に1640年に建設されたことや、社会科が1917年のロシアからの独立以降に発展し、現在は市民性育成のための教科として重要な教科となっていることがわかる。これは1947年に、日本の社会科が戦後民主主義を学ぶ重要な教科として成立したと類似している。

表2 フィンランドの近年の歴史と社会科教育・ヘルシンキ大学の歴史（Jan Löfström教授へのフィンランド社会科の聞き取りと歴史年表を組み合わせて筆者作成）

	フィンランドの歴史	ヘルシンキ大学とフィンランドの社会科教育の歴史
1200年代	フィンランド最古の都市、トゥルクが設立される	1640年 フィンランドで最初の大学、王立トゥルク・アカデミーが設立される。
1917年	12月6日、ロシアからの独立を宣言する。	1917年 ヘルシンキ大学と改称
1919年	議会改革により、身分、性別、社会的階層、財産や地位によって制限されない普通選挙権が全ての成人市民に与えられる	1925年 社会科の原型の田舎カリキュラムが成立
1995年	欧州連合（EU）に加盟	1963年 学校科目「歴史と社会科：(History and Social Studies)」が成立

Jan Löfström教授は半構造化インタビューで、次のように社会科の成立について述べる。

「…特定はできないが、20世紀初期の中学校の歴史の教師たちが時事問題の討論をかれらの歴史教育の最後の年に勧めたのが始まりという。1925年に、それは、田舎の小学校のカリキュラムに取り入れられた。しかし、それらが一つの科目となったのは、学校科目「歴史と社会科：(History and Social Studies)」で、1963年のことであり、上級、下級中学校においてであったようである。これは新しい知見であり、今後さらにフィンランドの社会科成立について詳しく見ていく必要がある。

## 2 フィンランドの社会科教科書の内容の分析

それでは実際にフィンランドの第9学年で使用されている社会科教科書の内容を分析してみよう。<sup>5)</sup>

### (1) Memo社会科教科書の単元「家族」の内容分析

Memoの社会科教科書の単元の内容は以下の表3のように、家族から始まり、コミュニティや仕事、福祉、消費、投票、政府、議会や外交政策まで幅広くフィンランド社会を生きていく術を学ぶ内容構成になっている。

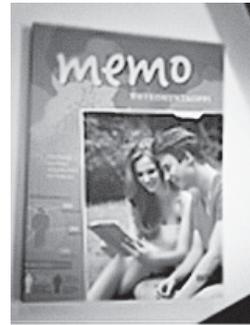


写真2 フィンランドの中学校社会科教科書Memo（教科書名：メモ 第9学年）（記述言語：フィンランド語）

表3 Memo社会科教科書の単元内容（筆者作成）

The title name of each unit	Japanese
1 family	家族
2 community	共同体
3 work	仕事
4 welfare	福祉
5 consumption	消費
6 enterprize	企業
7 national economy	国家経済
8 voting	投票
9 government parliament	政府議会
10 security legal foreign policy	社会保障法外交政策

フィンランドの第9学年の社会科教科書Memoの中から最初に学ぶ「家族」の単元「同棲か結婚か」の内容を取りあげる。この単元は家族の概念と財産分与の記述がある。最後の学習の振り返りのページを訳出した表4、表5を見てみよう。

- i 単元「同棲か結婚か」perheita on joka lahtoon
- ii 記述言語と記述内容  
(教科書記述言語：フィンランド語)

表4 Tahtavat練習前半部 (筆者訳出して作成)

Tahtavat 練習
<p>1 Selita seuraavat kasitteet 次の概念を説明しなさい。</p> <p>a. ydinperhe a nuclear family 核家族</p> <p>b. uusperhe 前の配偶者と異なった配偶者のいる家族</p> <p>c. yksinhuoltajaperhe ひとりの親の家族</p> <p>2 Mita oikeuksia ja vastuita avioituminen tuo aviopuolisille 配偶者に対して、結婚することはどんな権利と義務をもたらすか。</p> <p>3 Mita erotilanteessa tapahtuu omaisuudelle, jos parisukunta a) on avioliitossa b) ei ole avioliitossa? 次のカップルがもし離婚した場合どんな財産分与が起こるだろうか？ a) 結婚しているカップル b) 結婚していないカップル</p> <p>4 Ota kantaa viatteeseen Myos Avopuolison pitisi olla erotilanteessa ja Viranomaisten kanssa asioitaessa samassa asemassa kuin aviopuolison 立場討論をしなさい：離婚の状況や当局との対処の際に、同居者は配偶者と同じ立場にあるべきである</p>

表5 Tahtavat練習後半部 (筆者訳出して作成)

<p>5 Tutustu mannerheimin lastensuojeluliton verkkosivuilla oleviin nuortenennetin ja vanhempainnetin keskusteluihin</p> <p>a) Listaa mielestasi viisi mielenkiintoisinta keskustelua vanhempainnetista</p> <p>b) Mihin nuroten keskusteluihin voisit tse osallistua?</p> <p>子どもを守る分野の市民組織のホームページに行きなさい。そして両親のホームページと若者のホームページにおいてディスカッションしなさい。保護者のホームページで一番関心があるトピックスを5つ挙げなさい。</p> <p>a) あなたは、育児に関する5つの最も興味深い議論のうちどれを選びますか？</p> <p>b) どのような討論ができますか？</p>
---

iii 考察

表4を見てわかるように、振り返りの課題で、ひとりの親家庭や、再婚家庭や同棲など、具体的なフィンランド社会における多様な家族の問題から、財産分与など法律的な知識などを問う少し踏み込んだ内容になっている。また、表5のように育児の問題について、ホームページを活用して資料をもとに考えさせ、討論形態や内容を考えさせる指導法の記述も見られる。福祉国家としてのフィンランドにおいて、社会科教育は市民性を育成する重要な教科であるといえる。

(2) Forum 社会科教科書のESDの単元内容分析

i 概要

次に、別の社会科教科書のForumの第9章「気候変動と社会」のESDの内容を分析してみよう。まず、人々がいかに気候に影響を受けるか、温室効果とは何かが説明されている。そして、グローバルな気候変動に対してフィンランドができることを問い、グローバルな協力の重要性を述べる。最後の章は人口問題の持続可能な発展について考えるという流れになっている。フィンランドのナショナルコアカリキュラムには多くのESD (ESF) の記述があるが<sup>6)</sup>、この単元「気候変動と社会」は典型的な事例であるため、分析する。

ii 記述言語と記述内容

(単元23：気候変動と社会：フィンランド語)

iii 考察

表6 Forum社会科教科書の単元「気候変動と社会」の内容(筆者訳出して作成)

<p>①単元：気候変動と社会 Ilmastomuutos ja yhteiskunta</p>
<p>②内容構成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・気候変動は環境に影響を与える</li> <li>・フィンランドの気候変動</li> <li>・環境保護は協力が必要</li> <li>・フィンランド人の生産</li> <li>・発電、交通、農業、廃棄物、業界</li> <li>・ヘルシンキの電力は原子力と火力が主流である</li> <li>・フィンランドは地球温暖化対策が既に進んでいる。</li> </ul>
<p>③コラム記事</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・温室効果 (Kasvihuoneilmio) って何？</li> <li>・森林伐採の写真</li> <li>・水鳥の写真</li> <li>・風力発電所の写真 (クリーンエネルギーで電気をつくる)</li> </ul>
<p>④写真</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・完全に音が出ない電気自動車の写真</li> <li>・モルディブ大統領Mohamed Nasheedの写真</li> </ul>

表6のようにESDの単元では、教科書には、世界の環境問題について考えさせる写真が掲載されている。その中で、地球温暖化による海面上昇で、将来水没する危険性が指摘されているインド洋の島しょ国、モルディブのMohamed Nasheed大統領の写真を提示し、地球温暖化について生徒たちに考えさせようとしている。

モルディブはサンゴ礁や白い砂浜を持つ高級リゾート地として知られている。また風力発電は再生可能なクリーンなエネルギーであり、フィンランドのエネルギーは、「原子力発電所の増設」と「再生可能エネルギーの促進およびに研究」において政治的関連性がある。フィンランド政府は、持続

可能な開発のための教育の10年計画で、「個人が未来の世代の需要を満たす余地を満たしながら現在の需要を満たすこと。」というビジョンを打ち出している。この方針がフィンランドの社会科教科書にも反映されているといえる。

IV ヘルシンキ大学教育科学部の授業内容

1 ヘルシンキ大学の概要と学校建築

それでは、教師教育の視点から、教員養成の大学ではどのような講義を行っているのだろうか。

そこで、ヘルシンキ大学の教育科学部の授業の内容と考察を行う。

ヘルシンキ大学はフィンランドの最古の大学であり、最大の規模を誇り、広範囲で多様な講義プログラムが電光掲示板で紹介されている。ヘルシンキ大学の校舎も、図書館など市民にも開放され、ヘルシンキ市内の街の中に溶け込んでいる。

現在、約38,000人の学生が学位取得を目指して在籍している。ヘルシンキ大学は研究型大学であり、欧州研究大学連盟の加盟国の1つである。いろいろな大小様々なスペースで、グループで意欲的な議論が行われているのが観察できる。写真3のように、学校建築も部屋ごとがガラスで覆われ透明で光が入り明るく、他の教室で活発に授業に取り組む学生の姿が見られ学習の相乗効果があると考えられる。隣の教室からも授業の様子が見られるようになっている。これは学生がお互い刺激を受け協同的に切磋琢磨する上で大変意義がある。



写真3 ヘルシンキ大学の吹き抜けの大講義用のフロア…机をグループで固め、ノートパソコンを持ち寄って討論

## 2 社会科教育法の授業内容

### (1) 社会科教育担当の大学教員が使用しているワークシートの内容分析

それでは、大学での社会科教育法の授業はどのような内容であろうか。これについてJan Löfström教授にインタビューをしたところプリント資料を作成し活用しているという。ヨーロッパの歴史についての伝統的な問いを出し史料を読み取り活用して生徒が解釈することを要求している。

絵史料は3つ準備され、文章も提示されている。

①イギリスの町にある19世紀の産業革命の環境問題の絵②イスラエル西岸地区の分離壁③それぞれの史料に対するコメント、である。

このように社会科授業で絵史料や、風刺画などのプリントを活用することも多い。

また、Jan Löfström教授によれば、フィンランドでは社会科教員の資格を取るためには次の3つが必要である。1つはMAの学位。2つは、教職の授業60ECTSクレジット、3つは、社会科学の専門科目60クレジットが必要である。さらにもし中学校の教員資格を取る場合は120ECTSクレジットの単位が必要である。ECTSとは、ヨーロッパ単位互換制度 (ECTS-European Credit Transfer System) のことである。

### (2) 歴史の授業—絵史料を見て寸劇を演じる

演劇教育もフィンランドは盛んである。写真4は、教室の外の扉から歴史の授業の様子を撮影したものである。世界史の絵史料に登場する人物になりきって寸劇をグループでプレゼンしている様子である。

この授業は外から参観した。学生たちが体を動かし意欲的に楽しそうに学んでおり、歴史の授業にアクティブラーニングを組み込んでいる。



写真4 絵史料の登場人物のようにジェスチャーしてプレゼン  
ドアには、講義日程が示されている。

## 3 教育方法の授業

### (1) 概要

教育方法の授業は、「小学校での授業づくりの方法」についてであった。まず、教員が、授業づくりの基本事項についてスライドを使用して説明する。次に、学生たちは、課題の「自分が理想とする授業」についてグループで話し合い発表用スライド作成を行う。



写真5 教育方法の授業

### (2) 使用言語：英語

### (3) 考察

写真6は、「自分たちが理想とする授業」について、フィールドワークの社会見学の重要性をグループでスライドにより発表している。



写真6 学生たちのグループ発表の様子

## 4 幼児教育の授業

### (1) 概要

ヘルシンキ大学の幼児教育の講義室に特徴があり、幼児の観察ルートを準備している。

写真7は、来学予定の園児たちにどのように遊ぶかというプランをグルー



写真7 ヘルシンキ大学の幼児教育の教室

プで考え話し合っている様子である。

この部屋の隣に幼児の行動観察を行うガラスで仕切られた教室がある。

## (2) 使用言語：フィンランド語

## (3) 考察

フィンランドではアングリーバードというアニメが流行しており、プロダクションと提携して幼児教材を開発している。

写真8は、幼児教育のJari-Matti Vuorio教授、奥は、学生たちが話し合いをしている様子である。この教室には、いろいろな演出教材が準備しており、隣のガラス張りの部屋で幼児の行動観察ができるようになっている。



写真8 幼児教育のJari-Matti Vuorio教授とアングリーバードの絵本

ヘルシンキ大学では、参観したどの講義もアクティブラーニングが浸透していた。これらの大学での学びは、学校現場へ反映されるであろう。

以上のように、大学での教員養成のための授業が、フィンランドの社会科教育をはじめ、様々な分野の教育を支えていると考えられる。

## V ヌークシオ国立公園とESD教育



写真9 ヌークシオ国立公園



写真10 障害者のためのハイキングコースの道標

ヌークシオ国立公園 Nuoksisuo National Parkは、生涯学習都市エスポーの近郊にある。ここは地域の人だけでなく、学校の子どもたちも環境学習に出かけよく利用されている。写真9のヌークシオ国立公園のように美しい森や湖など自然に触れることができフィンランドの環境教育を中心としたESDについて考えることができる。また写真10のように、障害者のためのハイキングコースの道標も作られている。このヌークシオ国立公園はヘルシンキの郊外にありアクセスが良く、45平方キロメートルの面積がある。緑の森林と湖がある。きのこが生育し、3種類のハイキングコースがある。エスポーはESD教育のRCE<sup>7)</sup>の拠点ともなっている。

## VI 研究の成果と課題

### 1 成果

本研究の成果は以下のとおりである。

フィンランドでは、2014年にナショナルコアカリキュラム POPS : National Core Curriculum for Basic Education 2014 Finnish National Agency for Educationが改訂された。ナショナルコアカリキュラムの目標は、学びを奨励するだけでなく、必要な知識とスキルを保証することが示されコンピテンシーベースであることや学力を確実に獲得させるという強い意志が読み取れる。これに対応した社会科教科書は、フィンランド社会に起こっている家族の問題やESDの環境問題などの社会問題についての討論を重視し、学習形態として取りあげている。

フィンランドの社会科が、1917年ロシア革命後にフィンランドが独立した歴史的背景の中で1925年に社会科の原型のカリキュラムができ市民性を育成し民主主義のプロセスを学校で学ぶ重要な教科として出発している。これは、新しい知見である。

そしてフィンランドの社会科の内容は、世界の社会系教育の最近の潮流である市民性育成と同時に、環境問題などのESD（持続可能な教育）についても考える内容になっている。また同時に、これらの授業の内容を教えることができる力量を持つ教員養成にも大学では力を入れており、フィ

ンランドの学校教育と関連がある。教員養成としてのヘルシンキ大学は社会構成主義的なアクティブラーニングの講義が随所に組み込まれている。

## 2 今後の課題

以上述べてきたようにフィンランドは、わが国の新しい資質・能力を目指す学習指導要領の社会科学教育のあり方を考える上で多くの示唆を与える。フィンランドの社会科学教育や教師教育との関連に今後も注目していきたい。

## 謝辞

本研究の調査では、ヘルシンキ大学のJan Löfström教授、Jari-Matti Vuorio教授、授業参観にあたってはValtonen, Juha O教授にお世話になった。またエスポーのESD教育では、小・中学校特別支援教諭のMari Nuutinen氏にお世話になった。ここに感謝します。

なお、本研究は、南九州大学研究奨励費(2017年度)を使用した。

## <注>

- 1) PISAとは、15歳の生徒(義務教育修了)が持っている知識や技能を、実生活で直面する課題にどの程度活用できるかを評価する。読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野について、2000年以降、3年ごとに調査を実施している。
- 2) フィンランドセンターは1998年にフィンランドと日本の学術・文化の橋渡しをする機関として設立された。
- 3) National Core Curriculum for Basic Education 2014 Finnish National Agency for Education <http://www.oph.fi/English>  
日本では、フィンランドのナショナルコアカリキュラムは「全国教育課程基準」と訳されている。
- 4) POPS(フィンランド語版)では社会科学の目標について簡潔にまとめると次のような内容が書かれている。

The aim is to develop pupils' abilities in

democratic citizenship and participation. It includes, among other things, ability to look for information about society and economy, to assess its validity, to use it constructively, and to know the basic things about society and economy, in a national, European and global perspective.

「社会科学の目的は、民主的なシティズンシップや参画する人々の能力を発達させることである。それは、社会や経済についての情報を探し、その有効性を評価し、それを建設的に活用し、フィンランド国家、ヨーロッパやグローバルな視野から社会や経済についての基礎的な事柄を知る能力を発達させることである。」

(フィンランド語についてはJan Löfströmが英語訳したものを筆者が日本語訳した。)

- 5) 分析対象としたフィンランドの2社の社会科学教科書は、ヘルシンキ大学のJan Löfström教授により入手したものである。フィンランドは、1992年より、教科書検定制度を廃止し、自由発行制度になっている。
- 6) フィンランドでは、ESD(Education for sustainable development)よりむしろ、ESF(Education for sustainable future)と呼ぶことが多い。
- 7) RCEとは、「持続可能な開発のための教育に関する地域の拠点(Regional Centre of Expertise on Education for Sustainable Development: RCE)の略である。

## <参考文献>

- ・オッリベッカ・ヘイノネン・佐藤 学(2007)『学力世界一がもたらすもの(NHK未来への提言)』日本放送出版協会 p.91.
- ・大野栄三(2013)「ヘルシンキ大学の教科担任養成課程と博士課程」『北海道大学教職課程年報』No.3, pp.177-24.
- ・酒井喜八郎(2014)「シンガポールのシティズンシップを育成する多文化教育」『地理教育研究』No.14, pp.527-59. (科研:奨励研究「シンガポールの社会科学教育の動向~多文化教育と

- シティズンシップ教育との関連から」課題番号 25908023の成果の1つ)
- ・ 酒井喜八郎 (2015a) 「オーストラリアのESDとしての環境教育」『地理教育研究』No.16, pp.25 - 30.(国土地理協会学術研究助成による)
  - ・ 酒井喜八郎 (2016a) 「シンガポールにおけるCCEの内容と特質 — シラバスと教科書分析を中心に —」『社会系教科教育学研究』No.27, pp.91 - 100.
  - ・ 酒井喜八郎 (2016b) 「批判的思考力を育成するシンガポールの社会科授業」『南九州大学人間発達研究』Vol.6, pp.83 - 92.
  - ・ 澤野由紀子 (2016) 「世界の生涯学習都市 (5) フィンランド、エスポー」『社会教育』No.71 (8), pp.62 - 64.
  - ・ 高口努 (研究代表者) (2015) 「資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究」国立教育政策研究所教育課程研究センター (教育課程企画特別部会：資料4) p.121.
  - ・ 田中孝彦 (2005) 「フィンランドの基礎教育と教師教育 — 2003年秋の調査と研究交流から —」『教育』No.55, pp.41 - 49.
  - ・ 古屋光一 (2012) 「ヘルシンキ大学における理科の教師教育に関する調査 — 実習・教科科目群とリサーチに基づくカリキュラム開発に注目して —」『北海道教育大学紀要』Vol.62, No.2, pp.263 - 276.
  - ・ ヘイッキ・マキパー (2007) 『平等社会フィンランドが育む未来型学力』明石書店, P.207.
  - ・ 皆川直凡・富岡直美 (2016) 「21世紀型スキルの育成方法の探究を目的としたフィンランドの教育機関の視察の成果と展望」『鳴門教育大学情報教育ジャーナル』No.13, pp.9 - 14.
  - ・ 渡邊あや (2017) 「転換期の「教育立国」フィンランド：高学力の背景と次の一手」『児童心理』No.71, pp.49 - 53.
  - ・ RCE *Espoo developing sustainable city* United Nation University リーフレット

The Characteristics of social studies and relation between Teacher education in Finland  
- The Analysis of National core curriculum, textbook, lesson of University of Helsinki -  
Kihachiro Sakai

#### ABSTRACT

This study aims to clarify the history and characteristics of social studies education in Finland.

The author analyzed textbooks used to teach social studies in Finland and interviewed the faculty at Helsinki University.

As a result, the author found that Finland has an extensive welfare system and the subject of social studies includes various patterns of family and personal and urgent social problems in Finland society.

Finland places emphasis on social studies to develop citizenship education and ESD Education.

The prototype of social studies in Finland dates back to around 1925 after Finland declared its Independence in 1917. History and Social studies as subject started in 1963.

Education reform started in 1995 when trade with Eastern Europe declined, education for the next generation became a topic of public discussion in Finland.

The National core curriculum (POPS) was launched in 2014. The last time a core curriculum was published in 2004. POPS is revised around every ten years.

The goal of the POPS is not only to enhance the motivation of students but also aid them acquiring

the seven competencies.

The goal of social studies education is to support students becoming the citizen of active and responsible citizens.

The lessons at the University of Helsinki include that involve many Active Learning through the constructive approach, for example, lessons in subjects such as history, education method, and early childhood education.

The content of social studies is designed to develop the citizenship and ESD education.

In addition, the aim of Education of Science in University of Helsinki to try to mold the students to be better teachers.

Teacher training in Helsinki University has strong implications for school education in Finland.

The education practices of Finland could provide many useful suggestions for education in Japan.